

自律学習を導く読本のための グループ分け

～学びあう空気作り～

2018年10月27日（土曜日）
10：10-11：30【ワークショップ】

銘伝大学応用日本語学科
許均瑞

- まずグループ分けの経験に基づいてどのような問題があったか、ラウンド=ロビンでシェアしましょう。

ラウンド=ロビン

ROUND ROBIN

この技法は、特に多くのアイデアを出すのに有効です。なぜなら、すべての学生に参加を求めますし、次々と出てくるアイデアを妨げたり、抑える発言を禁じているからです。ラウンド=ロビンは、メンバーが平等に参加できるという点も保証しています。学生が出したアイデアはリストにし、次の段階の課題を作る際に参考にします。

⇒では、どうしてこの「協同」技法を使ったか。

→この技法を通して授業で学生が得られるものは何か。

□科目

□グループ分けの目的

□どのような概念（協同技法）のもとで授業を構造化するか

□その科目に適切な「異質性」はどのようなものなのか

自律学習が唱えられる現在、協同学習に関する研究は数多くあり、学習行為を能動／受動の観点から分析するものも多いが、

- ・自ら積極的に自己を授業に投入する「**自燃型**」
- ・自分の力をグループメンバーの作業に捧げる「**他燃型**」

——などを用いて学習者の参加態度・学習行動のパターンを分類するものもある。

- ・だが、それ以外にも教室では、力の出し方や参与度合に不安定性がみられる「**不完全燃焼型**」、終始無関心の「**不燃型**」の学習者も少なからず存在しているのは、現場に立つ教師であれば誰しも経験していることである（許2017）。

——そこで、いかに教室内外問わず学習者を「巻き込む」ように授業デザインを行うかが重要になってくる。

- メディア研究における空気モデルをそのまま援用することはしないが、
「強い強制力・圧力を感じさせる流動的な力の対立・同調」として、
「空気」という概念で教室空間における学習者の学習姿勢の変化を分析
することができると思われる。
- 巻き込む力、巻き込まれる流れ
 - ⇒ 学習の空気に抑えられ前進する
 - 自律学習

「空気」とは

- 「空気」という表現は日本語に特有のものである。
- 「空気」は、もともとメディア・世論・政治の力関係を表すメディア研究の用語。
- 「ある特定の意見、政策、決定への賛同を求める圧力（多くの場合、脅迫や社会的制裁を伴う）を、日本では「空気」と呼ぶ」（伊藤2006：3）

———というように、「雰囲気」と違って、「空気」は流動的、周りを巻き込む力がある動態的な表現である。

- 「空気」を用いて自律学習を考えると
 - 学習：態度、方法、習慣などは他人に対する観察眼を持つことで学ぶこと
 - したがって、自律学習は必ずしも自然に目覚めるものではない

では、どのようにグループ分けをしたらいいのか？

- ・協同学習とグループ学習の違いについて：

「...よい意味で仲間同士がつながっていないグループ、明確な学習目標が共有されていないグループ、役割が固定し、特定の学生だけが活動するグループ、そして、手抜きが頻繁に起こるグループ、こんなグループでの学習を単なるグループ学習とよび、協同学習と区別しています」（安永2012：75）

安永（**2012：70-74**） 安永悟『活動性を高める授業づくり』 医学書院

- ジョンソン兄弟の5要素は「①肯定的相互依存②促進的相互交流③個人の2つの責任〔自分の学びに対する責任・グループの仲間一人ひとりの学びに対する責任〕④集団作業スキルの促進⑤活動の振り返りと改善」である。
- そして、ケーガンの4要素は「①相互依存：肯定的相互依存の成立②個人の責任：個人の責任が明確③平等性：参加の平等が確保④同時性：同時性が配慮」である。
- したがって、能動的参加による授業目標の設定においては、グループ活動を取り入れるだけでは**ただ形式を変えるのみで、授業の本質的な改善にならない**ことが容易にわかる。

- 自分の担当科目に関して、グループ分けの必要があるかどうかを考える。
 - グループ分けをすると決める前に、授業をどう構造化することを考えたか。
 - 例：LTDで読本の授業をする⇒LTDのデザインに基づいて授業の構造化→そのためにグループ分けをする
 - どうしてグループ分けをするのか。⇒どのような学習成果を求めているのか→学習者と共通認識ができているのか。
 - グループ分け以外にその学習成果を達成する方法はあるか。
 - グループ分けをすると、教師と学習者が教室空間で授業を共につくり出すという関係になる

- 異質性

- どのような異質性が考えられるのか
 - 男女、年齢、クラス、などなど

- 人数を決める

- 教師自身にコントロール力があるかどうか
- 多くても5人まで
- 多くても11~12グループ
- 机の配置
- 学習者の参加意欲をどのように引き起こすか
- などなど、授業全体を見直さなければならない

- 読本の授業を見直すにつれ、読解活動の教育目標・教室活動、そして学習者をつなぐ学習参加体験をすべて構造化することが肝要になってくる。
- A.生素材の使用
 - →市販教科書と生の素材「新聞記事」を同時に採用。
 - 市販教科書：明確な単語・文型・文章構造...主な試験内容とする（小テスト・定期試験）
 - 生の素材「新聞記事」：さまざまな日本事情の紹介・理解／教科書以外の文章形態との接触によって「読む」行為の興味・耐性・熟練度を高める...試験範囲は漢語の読み（小テスト・定期試験）
- B.アクティブラーニングの導入
 - →LTD（Learning Through Discussion）：「話し合いの学習法」の導入
 - 予習と話し合いの効果を追求：予習の強制化・話し合い（LTD用語ではミーティング）に「クイック・シンク」という協同技法をさらに課して、授業時間を「グループでの話し合い」と「教師による質問」という2パートにする。
 - →LTDの効果を最大限に狙うために
 - グルーピングを工夫：グループと個人の働きを最大限に引き出すように授業中・課外問わず相互影響を狙う。
- 課ごとに学習者内省を実施：成績評価の一環として必須だと説明の上、学習者に課する。記述内容の良し悪しは評価せず、記入の有無だけが成績に関連すると設定した。予習と話し合いについて学習者の参加・学習成果などを内省問題として出すことによって、学習者自身の振り返りを促す。

グループ分け 異質性に基づくグルーピング：シェアスタートを参考に 學思達([HTTP://LTE-TAIWAN.WEEBLY.COM/25945234163603928304.HTML](http://lte-taiwan.weebly.com/25945234163603928304.html))の13番

- 授業時間を惰性的に過ごさないようにするためにはグループのメンバー同士がお互いに十分に刺激を与えあう必要があるため、グループ分けのポイントは**人数と異質性**だと安永（2012）は指摘している。
- 仲良しグループではなく、学習するためのグループ作り：グループ分けの目的と効果を学習者に開示する。⇒有意義なグループ分けということを理解してもらう
- 異質性をどう見極めるか
 - いうまでもなく異質性としては性別・年齢・習熟度など様々な基準を用いることができるが、大学では性別や年齢の異質性が求めにくい。教師にとって最も手軽に参考にできる異質性とは「成績」である。

ドラフト会議

- ステップI：事前準備
- （教師は、学習者を成績により4～5グループに分け、下表のような役職名を割り当てたリストを作り、PPTなどで学習者に提示できるようにしておく）
- 教師が設定したクラス内のグループ数に合わせて、マネージャーの人数を決める

成績に基づく「ドラフト会議」式グループ分け

役職名	マネージャー	監督	ヘッドコーチ	総合コーチ	トレーニングコーチ
成績の分布	下位	上位	中の下	中の中	中の上

マネージャーになる学習者の名前を出す

マネージャーがリストアップされた監督候補から
自分の意中の監督を指名

監督がリストアップされたヘッドコーチから意中
の人を指名

リストアップされた総合コーチが意中のチームを
指名

リストアップされたトレーニングコーチが意中の
チームを指名

- 成績重視というクラス風土から学習者と共に脱出する方法として、**成績だけで学習者を見ないようにする**ための措置である。
- 成績上位者にグループリーダーを任せれば、レベル的についていけない学習者が続出するか、上位者のみで構成されたグループが形成されることになってしまう。
- また、（成績上の）落ちこぼれと中間層もそれぞれのグループを形成、成績の違うグループが協力関係を結ばない平行線の関係となり、授業・教室という時空間でこの三層間の成績の変動がなかなかみられなくなる。
- そのような場合、**成績やその集団性によって生まれた「階級差」が授業全体の上昇志向を妨げる。**
- もちろんグルーピングしない場合、個々人の境界はなおさら明確で、グループ作業が要求されない場合、授業後の小集団もなかなか個々人の学習に影響を及ぼすようにはならない。

- ただ、ここで念を押しておきたいが、クラス内ですでに様々な激しい紛争（人間関係、成績争いなど）が存在しているならば、ドラフト会議を決行せず、**まず教師自身がクラス全体をコントロールする力があるのかを考慮した方がよい。**
- 学習者どうしの不信感が強い場合、教師の信念だけで押し切れるとは限らない。
 - したがって、ドラフト会議を通したグルーピングの結果決まったグループ分けを一学期を通じて実施する自信がない場合、**学習者の人間関係をある程度把握した上で、例えば一回限りの授業活動で試してみる**ことをお勧めする。

では、台湾の大学に限って考えてみると...

- 大人数：向いていないかもしれない。60～70人が限界
- 科目：重要科目かどうか（必修・選択必修vs.随意、学生個人の興味）

– 読本：うまくいく
– 大人数
– 重要科目

ドラフト会議

ニュースの日本語：うまくいく
少人数
興味を持つ

自由に組むが毎週違うメンバー

文化概論：うまくいかない

大人数

とくに力を入れて学びたいわけでもない

朝8時の授業

特に強く要求していないが、出身クラス（甲・乙班）と男女を半々にして組むよう指示（実際の状況はわからない）

どの科目にも全力を注ぐ必要はない。教師自身が見極めること。自分を許すこと。
グルーピングもそれ次第で、厳密にするかしないかという選択肢が出てくる。

練習～バス＝グループ

- どの科目で試してみるか
- なぜその科目にはグループ分けが必要なのか
- どのような異質性が考えられるか
- どのような困難が予測されるか
- それをどのように克服できるか